

官僚制

成蹊大学教授 (政治思想史)

野口 雅弘

民主主義の敵なのか友なのか



佐川宣寿・前国税庁長官=18年3月

柳瀬唯夫・元首相秘書官=18年5月

前川喜平・前文科事務次官=17年7月

官僚制を表す英語bureaucracyは「事務室」を意味するbureauの「支配」「権力」を意味するcracyが結合してできている。この語が生まれたのは18世紀中ごろのフランスで、基本的に否定的な意味だった。村子定規で、融通がきかず、血が通っていない、という役所への悪いイメージはすでにこのときから始まっている。バルザックも『役人の生理学』で「書類作り以外になんの能力もない人間」と書いている。

この語源的な説明に違和感を持つ読者も多いかもしれない。城山三郎『官僚たちの夏』(新潮文庫・6337円)に描かれているような官僚像のせいだろうか。支持基盤の個別利益に配慮せざるをえない代議士に対して、上からの目線で「国益」を語る高潔なエリート。この官僚イメージは高度経済成長を過ぎても長らく維持されてきた。

しかし、選挙で選ばれたわけでもない官僚が政策を決めるといってはそもそも「民主的」ではない。右肩上がりの経済成長と冷戦構造のもと、選択の余地が比較的狭かったため、「タテ割りの弊害は顕在化しにくかった。しかしもはやそうした状況にはない。1990年代からの「政治主導」の流れは、橋本龍太郎内閣から民主党政権を経て、現在まで続いている。

もっとも、政官の力関係の變化という説明はあまりに雑である。マックス・ウェーバーは、政治家が決定し、責任を負うという「政治主導」を強く主張したが、同時に合理的な行政の理念型を描いて、政治に権をほめてもいる。「即物的非人格性」

即物的非人格性



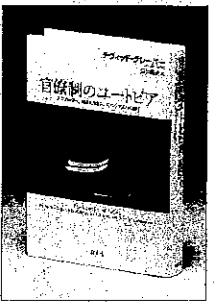
役人の生理学
バルザック(著)

鹿島茂訳
講談社学術文庫
907円



官僚制
マックス・ウェーバー(著)

阿閉吉男、脇圭平訳
恒星社厚生閣
1296円



官僚制のユートピア
デヴィッド・グレーバー(著)

酒井隆史訳
以文社
3780円

中立の隠れみの

中立・公正な行政に「使命」を感じているからではないのか。

もちろん、「中立・公正」は政治学的に最も注意が必要な用語の一つである。この言葉を隠れみのにして、責任逃れと利権保持がなされてきた(丸山眞男「軍国支配者の精神形態」超国家主義の論理と心理 他八篇 岩波文庫・1490円)。そして、個人を滅して爾々と仕事をすることは、政治決定には含まれる「非合理」を隠蔽し、ナチによる「行政的大量虐殺」にも結びついた(ハンナ・アレント「エルサレムのアイヒマン」みすず書房・4752円)。

さらに、透明な自由競争を掲げる新自由主義は、公募、審査、自己点検・評価の書類書き(ペーパーワーク)で私たちを追い立てている。「小さな政府」どころか、かえって官僚制のルールの強化になってはいないか。「官僚制のユートピア」で文化人類学者デヴィッド・グレーバーはこう問いかける。バルザックの風刺は昔話ではない。官僚制はデモクラシーの敵でもあり、友でもある。いつ涙を流しても抵抗すべきなのか、いつ「がんばれ」と言うべきか。問われているのは「私たち」の眼力であり、振る舞いである。

◇のぐち・まさひろ 69年生まれ。著書に『闘争と文化』『官僚制批判の論理と心理』。